



NAKANOSHIMA
MUSEUM OF ART, OSAKA

報道関係者各位 | 2026.02.20

さよなら、美術館。

驚異の部屋の私たち、消滅せよ。

2026
4/25 (土)
— 7/20 (月祝) — 森村泰昌・ヤノベケンジ・やなぎみわ —

大阪中之島
美術館



開催趣旨

森村泰昌、ヤノベケンジ、やなぎみわが大阪中之島美術館に集結！国際的に活動しつつ時に交錯してきた彼らが、2026年、万博のポストイヤーに再び邂逅します。なぜこの3人が集まるのか。そのタイトルは何を意味するのか。さらには、「消滅せよ。」という言葉の先には何があるのか。新作を中心に構成される本展は、同時に作家それぞれのこれまでの活動が凝縮された「驚異の部屋」となります。ときに協働し、ときに衝突しながら、絶対的に孤独な表現者として個々の作品世界を美術館という舞台でぶつけ合います。

本展のみどころ

- 1 森村泰昌の呼びかけにヤノベケンジ、やなぎみわが応答。
世界で活躍する3作家が集う、未だかつてない展覧会。
- 2 本展のための新作が多数。作家たちが今、考える表現を展示。
- 3 様々な場面で交錯してきた3人が初の共同制作！本展にてお披露目します。

作家からのコメント

本展の発起人である、森村泰昌氏のテキスト「「驚異の部屋の私たち、消滅せよ。」は、なぜこの3人なのか」を公開しています。

本テキストは本展を深掘した図録に掲載されない森村氏執筆のテキストです。テキストは本リリースの別紙および大阪中之島美術館 **note**にてぜひご覧ください。

大阪中之島美術館 **note**

<https://nakka-art-museum.note.jp/>

本展の構成

プロローグ～「私たちは、それぞれの旗を掲げる。」

冒頭、3人による共同制作の様相を呈する立体作品がいきなり登場する。

とはいえ本作は純然たる共同作品ではない。「あなたなら自分自身が掲げる旗として、どんな旗を選びますか」という、三者三様のいわば「私」宣言の場である。

それぞれの旗の種類は異なっている。ではその行く先は？目指す行き先が、これから5つの「驚異の部屋」で示されることになる。



Room1からRoom4～観客は見知らぬ都市の散歩者

展示室は、「Room1：博覧会は子供の領分（ヤノベケンジ）」、「Room2：広場にパノラマ島奇譚（森村泰昌）」、「Room3：坂道のオード(賛歌)（やなぎみわ）」、「Room4：迷宮を紡ぐ厳粛な綱渡り」と続く。「博覧会」「広場」「坂道」「迷宮」と、観客は見知らぬ都市空間のような展示室を散歩者として巡り歩く。

それぞれの「Room」は、いずれもが美術館展示からの逸脱の様相を呈し、いわば踏み外された美術館としての「驚異の部屋」となっている。

Room5 絶望するな、では失敬。

展覧会の内容を決めていくうえで、当初は想定されていなかった「消滅美術館」という発想が組み込まれて、Room5が最後を締めくくる空間となった。

本展Room1からRoom4までの展示は、物量、サイズ、重量などにおいて、過剰で饒舌で重い磁場となっている。Room5ではその磁場が一気にホワイトアウトしたかのような、「消滅」性に反転する。

展示詳細

■ プロローグ

本展覧会は超高速の彫刻、自己像の造形、旗の彫刻が同時に立ち現れる場面から始まります。3人の表現が衝突する導入部となります。

森村泰昌 ヤノベケンジ やなぎみわ
《私たちは、それぞれに旗を掲げる。》（ラフスケッチ） 2026年



■ Room1：博覧会は子供の領分

第1室はヤノベケンジによる「博覧会は子供の領分」。大阪万博跡地での原体験を起点に、新旧作品が驚異の部屋のように集積されます。未来の作家と作品が時空を横断し、子供の想像力を解き放つ創造のエネルギーを体感できる、博覧会的想像力に触れていただきます。



ヤノベケンジ
「博覧会は子供の領分」(インスタレーションイメージ図) 2026年



ヤノベケンジ
《稲妻絵画》(イメージ図) 2026年

＊ヤノベケンジ《稲妻絵画》は1日に2回（11時、16時）、特斯拉コイルによる電気が流れる作品をご鑑賞いただける予定です。

＊本展覧会では定期的に強い電磁波を発生させる作品を展示しており、ペースメーカーの作動に影響を与える場合があります。ペースメーカー装着者は事前に係員までお申し出ください。

■ Room2：広場にパノラマ島奇譚

第2室では森村泰昌の新作《M式・大阪八景》を紹介します。大阪にちなんだ8つの場所で撮影したモリムラ作品を、昭和文化を象徴する映画看板の絵師とのコラボレーションで看板化！本展のための特別なシリーズです。

展示作品にまつわる森村自身の「語り」（音声メッセージ）を聴くことによって、観客は見知らぬ街を見物して回るような気分へと誘われます。



森村泰昌《M式・大阪八景／旧陸軍第四師団庁で、清聴よせ！》(部分)
2026年



森村泰昌《M式・大阪八景／通天閣の前でバルドーもどき》
2026年



■ Room3：坂道のオード（賛歌）

第3室では、やなぎみわによる「黄泉平坂」の世界を紹介します。福島の特産桃を、毎夏10年間撮影した写真作品「女神と男神が桃の樹の下で別れる」、火、土、鐵、水などを産んだ女神をテーマにした鑄造作品、新作映像のほかに、5月28日29日30日には、舞台公演「黄泉平坂～排斥と遊戯～」も上演予定です。古事記を新訳する作家の表現に触れてください。



やなぎみわ 《Juggling with Peaches I》 2024年
撮影：守屋友樹



やなぎみわ 《「女神と男神が桃の木の下で別れる」川中島 II》
2016年

■ Room4：迷宮を紡ぐ厳粛な綱渡り

第4室では3人の作家が再び集結。各作家がいま最も関心のある内容から制作された、最新作を紹介します。

森村泰昌最新作

大阪の日本画家、木谷千種《浄瑠璃船》（1926年、大阪中之島美術館蔵）を原画に、森村流の新たなビジュアル世界に挑戦します。いわゆるVFX的な手法を選択せず、あえてかつての実写優先の「特撮」的な手法を用いることによって、「生身」としての「リアル」にこだわって制作。また本作は、森村の最近のテーマのひとつである「勇ましくない絵画」の第一弾として発表されます。



森村泰昌《境界線上の舟遊び（「浄瑠璃船」のために）》習作
（参考作品）2026年



ヤノベケンジ最新作

新作《八卦連環》シリーズ全8本が、今回初めて一堂に揃います。

あわせて、刀匠・河内國平との協働による太刀作品《天地以順動》も展示されます。

《八卦連環》シリーズは、八卦から着想した8つのテーマを軸に、これまでのヤノベ作品を引用しながら、8つの世界を表現した装飾が短刀の^{こしらえ}拵に施されています。



ヤノベケンジ
《八卦連環・火》 2025年
撮影：表恒匡

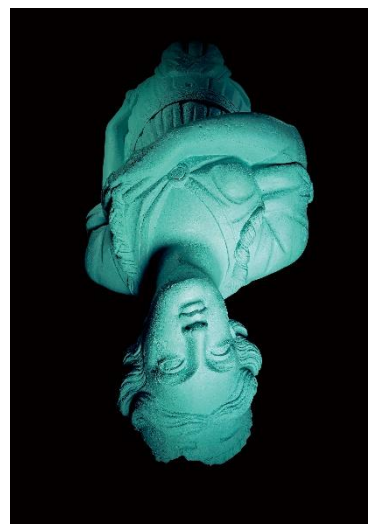
やなぎみわ最新作

「アルゴの船首」「ロストラ柱につけられた船首たち」

世界中に多く残された「女性の船首像」たちを撮影した写真シリーズ（2019年制作）と、新たに創作した船首像の写真（2026年制作）を、合わせて展示します。

「ロストラ柱」とは、古代ギリシャに始まる、敵の船から切り取った船首を飾る戦勝記念塔。

また「アルゴ船」の冒険譚は、英雄たちによる征服と、周辺諸国の植民地化が語られる最古の物語です。



やなぎみわ《アルゴ船の船首像 2》
2019年

■ Room5：絶望するな。では、失敬。

まったく予想だにしない展示室における「消滅」。何が消滅するのか。なぜこの3人なのか。本展の核心を現場でご覧ください。

演出：やなぎみわ 原案：森村泰昌×ヤノベケンジ×やなぎみわ 《消滅美術館にて》 2026年



■ エピローグ

本展までの2年間の記録から、映像作家の林勇気が「驚異」のドキュメンタリー映像を制作。エピローグとして上映します。



林勇気《Frames》2026年

作家プロフィール



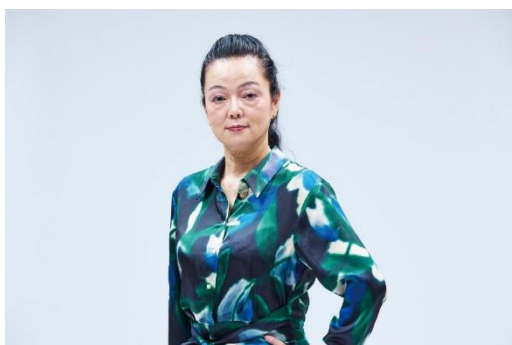
森村泰昌（もりむら・やすまさ）

1951年、大阪市生まれ。大阪市在住。1985年に初めてのセルフポートレイトの作品《肖像／ゴッホ》を発表する。以降、「わたし」という一貫したテーマのもと、「なにものかに扮するセルフポートレイト写真」を発表し続けている。その制作は、モチーフとなる人物／作品について、念密なリサーチとジオラマ、スタジオセットの作成、コスチュームやメイクなどの過程を経るものであり、独自の視点から対象に迫ることによって、作品が完成する。また、映像、パフォーマンス、執筆など多岐にわたる活動を行なっている。



ヤノベケンジ

1965年、大阪府生まれ、茨木市育ち。1990年代初頭より、「現代社会におけるサヴァイヴァル」をテーマに機能性を持つ大型機械彫刻を制作。ユーモラスな形態に社会的メッセージを込めた作品群は国内外から評価が高い。2017年、「船乗り猫」をモチーフにした、旅の守り神《SHIP'S CAT》シリーズを制作開始。2022年に開館した大阪中之島美術館のシンボルとして《SHIP'S CAT（Muse）》（2021）が恒久設置される。



やなぎみわ

神戸市生まれ。女性をテーマにした写真作品で個展多数。2009年ヴェネチア・ビエンナーレ日本館で個展。2010年より舞台作品を創作し「1924 三部作」を美術館と劇場で上演。「ゼロアワー 東京ローズ最後のテーブル」で北米ツアー。台湾製の特殊車両による野外巡礼劇「日輪の翼」（原案・中上健次）を開始。2019年、個展「神話機械」で機械と演者が共演する「MM」を上演。21年には日台共同制作で台湾オペラの演出も手掛けた。2025年は六甲ミーツ・アートにて水上劇「大姥百合」、BENTEN Art Nightの歌舞伎町能舞台にて「黄泉平坂 排斥と遊戯」を上演。



関連イベント

開幕記念 作家鼎談

「なぜこの3人なのか」。作家から始まったこの展覧会の経緯、裏側を作家自ら語ります。

日時 2026年4月25日（土）14:00 – 15:30（開場13:30）
登壇者 森村泰昌、ヤノベケンジ、やなぎみわ
会場 大阪中之島美術館 1階ホール
定員 150名（先着順、事前申込不要）
参加費 無料＊ただし本展観覧券（利用後の半券可）が必要

舞台公演「黄泉平坂 よもつひらさか ～排斥と遊戯～」

「男神イザナギ 黄泉平坂にいたりしとき 女神イザナミ 追いきたり」

『古事記』によれば、火神を産んで亡くなった女神を追い、あの世に向かった男神は、変わり果てた妻の姿に恐れ逃げ出し、桃の実を投げつけたという。

火や鉱物、土や水を産み出した女神は、死の国へ追いやられることになる。

今回の舞台では、排斥された女神が、本来の姿を現して男神に対する姿が見どころとなる。

下掛宝生流ワキの名手である安田登が、男神イザナギを、稀有な身体表現者である渡邊尚が、女神イザナミを演じる。

作・演出 やなぎみわ
出演 懸衣翁・男神イザナギ 安田登（下掛宝生流ワキ方能楽師）
奪衣婆・女神イザナミ 金沢霞（琵琶奏者）
女神イザナミ 渡邊尚（身体研究家・サーカスアーティスト）
音楽 JanMah（ギタリスト）
舞台監督 黒飛忠紀（幸せ工務店）
照明 藤本隆行（Kinsei R&D）
音響 高田文尋（株式会社ソルサウンドサービス）
ヘアメイク 吾郷泰英

広報デザイン 木村三晴（一般社団法人MIWA YANAGI OFFICE）

制作 森信子（Wolf-note）

日時 2026年5月28日（木）17:30開演
5月29日（金）14:00開演／17:30開演
5月30日（土）11:00開演／17:30開演
＊公演時間：60分

会場 大阪中之島美術館 1階ホール
定員 140名
参加費 4000円（税込、前売・当日）
販売場所 ローソンチケット（Lコード：52954）



photo by Yutaro Yamaguchi



開催概要

展覧会名	驚異の部屋の私たち、消滅せよ。 — 森村泰昌・ヤノベケンジ・やなぎみわ —		
会期	2026年4月25日（土）－7月20日（月・祝）		
休館日	月曜日 ＊4月27日（月）、5月4日（月・祝）、7月20日（月・祝）は開館		
開場時間	10:00－17:00（入場は16:30まで）		
会場	大阪中之島美術館 5階展示室		
主催	大阪中之島美術館、読売新聞社		
観覧料	一般	1,900円（1,700円）	
	高大生	1,300円（1,100円）	
	小中生	500円（300円）	

2026年2月25日（水）10時よりチケット発売開始

＊（ ）内団体料金 ＊税込価格

＊団体料金は20名以上。団体鑑賞をご希望になる場合は事前に大阪中之島美術館公式サイトからお申込みください。

＊学校団体の場合はご来場の4週間前までに大阪中之島美術館公式サイト学校団体見学のご案内からお申込みください。

＊障がい者手帳（身体障がい者手帳、療育手帳、精神障がい者保健福祉手帳）をお持ちの方（介護者1名を含む）は当日料金の半額（要証明）。ご来館当日、2階のチケットカウンターにてお買い求めください。（事前予約不要）

＊本展は、大阪市内在住の65歳以上の方も一般料金が必要です。

＊日時指定制ではありません。展示室内が混雑した場合は、入場を規制する場合があります。

＊災害などにより臨時休館する場合があります。

【主なチケット販売場所】 大阪中之島美術館チケットサイト、ローソンチケット(Lコード: 51719)

お問合せ 06-4301-7285（大阪市総合コールセンター） 受付時間8:00－21:00（年中無休）

展覧会公式サイト <https://nakka-art.jp/exhibition-post/sayonara-2026/>

[広報用画像一覧]

本展の展示物等の画像を、広報素材としてご提供いたします。下記申し込みフォームよりお申し込みください。

[広報用画像申込フォーム]

<https://forms.gle/fqehToFNTRuB4jrSA>

■ 広報画像をご使用の際は、別紙に記載の「画像使用全般に関する注意」を必ずご確認ください。

(1) 	(2) 	(3) 
(4) 	(5) 	(6) 
(7) 	(8) 	(9) 
(10) 	(11) 	(12) 
(13) 	(14) 	(15) 



[広報用画像クレジット一覧]

No.	画像名
1	本展メインビジュアル ＊クレジット不要
2	森村泰昌 プロフィール画像 ＊クレジット不要
3	ヤノベケンジ プロフィール画像 ＊クレジット不要
4	やなぎみわ プロフィール画像 ＊クレジット不要
5	森村泰昌 ヤノベケンジ やなぎみわ 《私たちは、それぞれに旗を掲げる。》(ラフスケッチ) 2026年
6	ヤノベケンジ 《稲妻絵画》(イメージ図) 2026年
7	森村泰昌 《M式・大阪八景／旧陸軍第四師団庁で、清聴よせ！》(部分) 2026年
8	森村泰昌 《M式・大阪八景／通天閣の前でバルドーもどき》 2026年
9	やなぎみわ 《Juggling with Peaches I》 2024年 撮影：守屋友樹
10	やなぎみわ 《「女神と男神が桃の木の下で別れる」川中島 II》 2016年
11	森村泰昌 《境界線上の舟遊び（「浄瑠璃船」のために）》習作（参考作品） 2026年
12	ヤノベケンジ 《八卦連環・火》 2025年 撮影：表恒匡
13	やなぎみわ 《アルゴ―船の船首像 2》 2019年
14	林勇気 《Frames》 2026年
15	photo by Yutaro Yamaguchi

報道関係者
お問い合わせ先

「驚異の部屋の私たち、消滅せよ。」広報事務局（株式会社TMオフィス内）
担当：馬場、永井、西坂 TEL：090-6065-0063（馬場） 090-5667-3041（永井）
テレフォンセンター：050-1807-2919 FAX：06-6231-4440 E-MAIL：kyouinoheya@tm-office.co.jp



「驚異の部屋の私たち、消滅せよ。」は、なぜこの3人なのか

森村泰昌

1 すべての話はゼロから始まった。

「驚異の部屋の私たち、消滅せよ。」展は、「私たち」の提案からはじまった。

「私たち」とは、言うまでもなく本展の出品作家である森村、ヤノベ、やなぎの3人である。森村がこの3人による展覧会をやりたいと言い出した。これにヤノベとやなぎが理解を示してくれた。そして大阪中之島美術館からの賛同を得て実現の運びとなった。

以上のように簡潔に記すと、事態はいかにもスムーズに進められたかのような印象を受ける。しかし実態はずいぶんちがっていた。

2024年3月27日、「私たち」3名と美術館の担当キュレーターが集まり、第一回目の会議が開催された。この時、誰からともなくもちあがったのは、概要次のような議題であった。「さて、3人でどのような展覧会をするのですか？」

何をするかも決まっていないとは、なんと“無企画な企画展”であろう。異例というよりは異常ださえ言える。ところが「私たち」3人はそれがさも当たり前であるかのように、「何をするのか」をいちから議論しはじめた。

爾後、出品作家と美術館キュレーターは、月に一度の定例会議を持つことになった。ああでもないこうでもない、繰り返し「何をするか」について話しあわれた。毎回話題はあらぬ方向へと飛び火して収拾がつかなかった。たとえ決定事項であっても、必ずしもそれは確実な「決定」とはならず、次回の会議で蒸し返され振り出しに戻るケースも珍しくはなかった。

時短や効率化といった今日的な時流とは真逆の、なんともまどろっこしい会議の連続であったが、これが「私たち」3人には性にあっていただ。美術館サイドとしては、「いいかげん、さっさと決めて欲しい」と強い口調で進言したいところだったに違いない。しかしそれをやってみれば可能性の芽を摘みとることにともなりかねない。何かが発酵してくるのを気長に待つほかなかった。美術館サイドのみならず、「私たち」3人にとってもそれは同じ思いであった。

2 「なぜこの3人なのか」という問い

「何をするのか」が白紙ではじまったことに加え、当初からの懸案事項がもうひとつ積み残されていた。何かというとそれは、世界にあまたいる表現者たちのなかで、ことさら森村、ヤノベ、やなぎという3人が選ばれたのはなぜなのか。その意味、その必然性についてである。「なぜこの3人なのか」「この3人でなければいけないのか」という、ご無理ごもつともな質問に、しかるべき回答がまったく用意されていなかった。

その責任のすべてはこの私にある。なぜなら「私たち」3人の展覧会をと言い出したのは、他ならぬ私（モリムラ）だったからである。

正直に告白すると、当初の私の思いは単純だった。「森村、ヤノベ、やなぎ」の3人展をこの私自身が見てみたいという私的な好奇心があるだけだった。「きっとおもしろい展覧会になる」と直観してはいたが、「なぜおもしろいのか」については、さほど深くは考えていなかった。

いくつもの記憶がよみがえる。

3人は共に関西エリアに生まれた。同じ美術大学の出身者でもあった。ヤノベとやなぎは、専攻は異なるが同学年だった。



た。

1998年に大阪市中央公会堂で森村がプロデュースしたアートプロジェクト「テクノセラピー 心と体の美術浴」の出品作家の中に、ヤノベ、やなぎの名がクレジットされている。(図1 図2)

森村が芸術監督を務めた2014年開催の横浜トリエンナーレでは、やなぎがその後、多彩な野外劇を上演することになる移動舞台車、あのやなぎオリジナルのデコトラがはじめてお目見えする。(図3)

やなぎと言えば、こんなことも思い出される。1995年、森村自身が映画女優に扮するセルフポートレイトのシリーズで、「原節子」をテーマに選んだときのことである。当時やなぎが暮らしていたアパートの一室でその撮影をさせてもらったことがある。醤油の一升瓶を抱えた「東京物語」の原節子が顔を出してもちっともおかしくはない、そんな雰囲気が漂う古風な木造アパートだった。(図4)



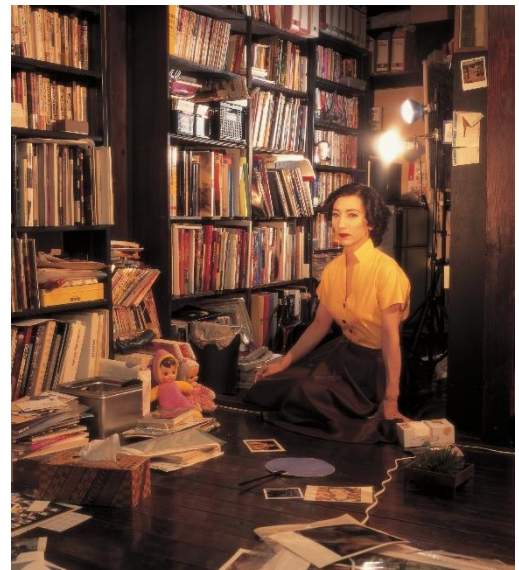
左：図1「テクノセラピー 心と体の美術浴」(大阪市中央公会堂 1998) より
MEM提供



右：図2「テクノセラピー 心と体の美術浴」(大阪市中央公会堂 1998) より
やなぎみわ作品「Kagome Kagome (1998) 映像 インスタレーション」の展示
MEM提供



左：図3 舞台トレーラー公演 PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015
撮影：表恒匡



右：図4 セルフポートレイト／ハラ・セツコとしての私・1 (森村泰昌 1996)



ヤノベとの思い出も語りたい。1992年、森村がゲスト出演し、ヤノベが司会をする「クイズおおいに語るでショー」という人を喰ったイベントが、京都市立芸術大学の彫刻棟で開催された。ヤノベはつい先日購入したという日本の甲冑を身に纏ったまま、最後まで司会進行を続けた。ちなみにこのイベントには、中原浩大、石橋正義、西山美な子らも関わっていた。(図5)

1999年、京都のアートスペース虹で開催された「ノート」展も忘れられない。森村、ヤノベ、やなぎによる3人展で、制作ノートやそれに類する“ノート”を持ち寄って展示するというギャラリー企画だった。小規模ながら27年前に「私たち」は3人展をすでに経験していたのである。(図6)



図5 「おおいに語る企画No5 /森村泰昌 クイズおおいに語るでショー」
ビデオ記録より（1992年5月11日 京都市立芸術大学 彫刻棟にて）



図6 「note'99」（アートスペース虹での三人展 1999）
虹の事務所（熊谷寿美子氏）提供

こうした私的でドメスティックでもある過去の記憶を、私はヤノベケンジややなぎみわとの出会いとともに思い起こす。そして切ない気持ちにとらわれる。

私やそしてたぶんヤノベややなぎにとってもそうだと思うが、少なからず後年の自分たちの血となり肉ともなったであろう、上記のような大切な体験がある。しかしそれらの多くはおそらく美術史年表に記載されることがないだろう。美術史とは、アートシーンの中心で起きた特筆されるべきトピックスを並べることによって編纂されることがほとんどだからである。

私は自分の関わった過去の出来事の記憶をどこかに置きっぱなしにしたまま、今を生きていることの無為無策を痛感する。このまま放置すれば、ますますそれらの記憶の濃度は希薄になってゆくだろう。過去の記憶に対するそのような仕打ちに申し訳が立たず、なんとも切ないのである。

3 “孤独のランナー”としての「私たち」

もちろん、「私たち」が過去の記憶を共有しているからといって、「仲良し3人組」の和気あいあいとした楽しい同窓会をめざしたいなどとは誰も思っていない。むしろ「私たち」は、（これはあくまでポジティブな意味合いを込めて言うのだが、）ほんとうのところ、「仲良し」とは真逆の間柄なのである。毎回の定例会議においても、意見の食い違いは明らかだった。しかしすれ違いではなかった。対立軸が明確に示されることによって論点がむしろ噛みあって、問題の箇所が浮き彫りになってくる。そして「なにをやるか」についての議論も深まっていった。



「私たち」3人は、(これもまた自慢げに明言してみたいのだが)、どうしても頑固な「私たち」であり続けた。どんな些事であっても相手にあわせて妥協するということはしなかった。

思うに「私たち」は、おそらく相手が誰であっても、折りあうことなんて出来はしないのだろう。「私たち」は、誰にもゆずれぬそれゆえどこにも属しえぬインディペンデントな「私」を背負い続け、いつだってたった独りでひた走る、それぞれが“孤独のランナー”なのである。

4 「王」と「道化」のいる風景

しかしあらためて考えなおしてみるのだが、ことほどさように妥協を許さない「私たち」、いや正確にいうなら、「私たち」とひとまとめにしてしまうこと自体が憚られるくらい、相反する三つの別個の「私」であるにもかかわらず、なぜ今こんなふうにとどこに集まり、ああだこうだと言いついていられるのだろう。もしかしたら「私たち」はまったく違っているかに見えて、じつは意外にも似通った「体質」を持って生まれて来てしまっているのではないか。

その「体質」とは何かというと……。いささかいきなりの感が否めないが、私はそれを、“「王」であることを頑なに拒む精神”であると捉えたい。

世界を我がものにしたい、世界の中心に君臨したいと欲望する「王」の体質というものが、地球上のいたるところに、またいつの時代にもかならず立ち現れる。その是非を問うことはひとまずおくとして、「私たち」3人は、この「王」として君臨することに執着する存在の在り方に、どうやら敏感にアレルギー反応を起こしてしまう「体質」の持ち主であるらしいのだ。

例えばフィンセント・ファン・ゴッホは、明らかに美術の中心に君臨する「王」ではなかった。当時の美術の中心地であったパリのサロンからは、はるか彼方のニューネンやアルルやサン＝レミで売れない絵を描き続け、(あえて極論するなら) そのおかしげな画風はみんなの笑いのタネにもなっただろう。

ゴッホは「王」ではなかった。むしろみんなから「あれはなんだ」と笑われる「道化」の体質を見事に体現していた画家だった。だが笑われることによって、やがて本当に笑われるべき存在は、世界の中心に鎮座し世界を征服したかのような錯覚におちいつている裸の王様のほうなのだと、やがて真実が暴かれる。ゴッホは「道化」であったが、それは「王」にも匹敵する、あるいは「王」を穿つ能力の持ち主としての「道化」であったにちがいない。

願わくば「私たち」も、世界の「王」ではなく、世界の中心から離脱した周縁の地で踊る「道化」でありたいものだ(と思っているはずである)。少なくとも「私たち」は、戦略的に狙いを定めて世界の中心の玉座をせしめようと画策するなどという無粋な芸当は、生まれながらの「体質」としてどうも苦手としている手合いのはずである。

本展は、3人の「道化」のまことに勝手気ままな踊りっぷりを各所でご覧いただく、一種の見世物小屋となるだろう。軒を連ねる見世物小屋をあれこれと覗き見してもらっているうちに、それらが次第にもうひとつの、あるいは正真正銘の王宮に見えはじめたら、拍手ご喝采。「私たち」3人がこうして集まって、「驚異の部屋」だ、「消滅」だと戯言をまくしたてた徒労も報われる。

力の限り踊り続けましょう。世界の果てから忘却を呼び起こすために。世界の中心を嘲笑うために。